2017年度 ロザリー・レナード・ミッチェル 記念奨学金募集案内

本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とし、2000年度から募集を始めた奨学金です。

書類提出期間： 2017年 10月2日（月）～2017年 10月31日（火）17：00まで
書類提出先： 学生部学生厚生課（池袋）・学生部学生厚生課（新座）・独立研究科事務室
採用発表： 11月27日（月） 学生部学生厚生課（池袋）奨学金掲示板、学生部学生厚生課（新座）奨学金掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板（10号館通路）に掲示予定
授与式： 12月上旬（予定）

（A）ジェンダーフォーラム論文賞

対象： 学部学生・大学院生（個人・団体）
支給額： 優秀 10万円、佳作 5万円
採用件数： 1～4件
選考方法： 論文審査
提出書類： ①ジェンダーフォーラム論文賞申込書*
②論文（日本語 2万字以内の未発表論文）
備考： 執筆にあたってはジェンダーフォーラム『年報』投稿規定に従うこと。

※（B）活動・研究助成金の募集は終了しました。詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。
ジェンダーフォーラム事務局（池袋キャンパス６号館１階）　Tel：03-3985-2307　E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
＊申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生厚生課（池袋）、学生部学生課（新座）、独立研究科事務室窓口にあります。ホームページ上からもダウンロードできます。（http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/）

2017年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金 B 授与者決定!

2017年度前期に行われた（B）活動・研究助成金には５件の応募があり、2017年５月15日に開催された選考委員会において、２件に助成金を授与することを決定いたしました。また、授与者には、５月29日に開催された授与式にて、和田悠所長より奨学金が授与されました。選考結果は下記のとおりです。

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（B）活動・研究助成金選考結果

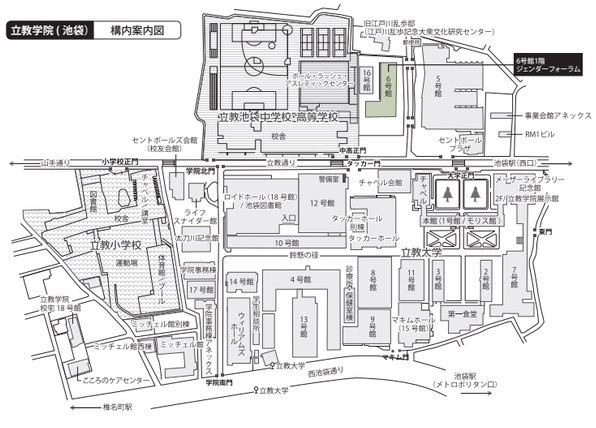
奨学生氏名（所属）	研究課題	支給額
相藤　巨（21世紀社会デザイン研究科比較組織ネットワーク学専攻博士後期課程４年）	「地方自治体の政策形成における女性の参画に関する考察――消滅可能性都市を事例として」	10万円
菅森　朝子（社会学研究科社会学専攻博士後期課程２年）	「乳がん同病者関係における、乳房再建をめぐるコミュニケーション」	10万円

立教ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」にとらわれず、性差やセクシュアリティ（性自認・性的指向など）についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー（gender）とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女／男らしさ」「女／男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムはジェンダーについての教育・研究拠点として、1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒーアワーなどを開催しています。

開室日： 毎週月曜日～金曜日
開室時間： 10：00～16：00
場所： 立教大学池袋キャンパス６号館１階
TEL&FAX： 03－3985－2307
E-mail： gender@rikkyo.ac.jp
URL： http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/

ジェンダーフォーラムは2013年3月に、ミッチェル館から６号館へ事務室を移転しました。



詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板または HP でご覧ください。

Rikkyo Gender Forum
Gem
News Letter

Vol·37
2017.10.1
立教大学ジェンダーフォーラム

Ｇｅｍとは…光輝く宝石。
ジェンダーフォーラムの前身である女子学生寮「ミッチェル館」にちなみ、Gender Encountering at Mitchell（ミッチェル館でのジェンダーの出会い）を意味します。

ジェンダーフォーラムの初心：20周年に向けて

和田 悠（ジェンダーフォーラム所長／文学部教育学科准教授）

立教大学ジェンダーフォーラムが設立されたのは1998年４月。来年度で20周年を迎えます。

現在、運営委員会では20周年に向けて動き出し始めています。10周年の時は小冊子『ジェンダーミニ事典』を刊行しました。今回はジェンダーフォーラムの歴史を振り返り、活動の現在を紹介する映像制作を計画中です。エコロジカル・フェミニストの青木やよひさんの蔵書を譲り受け、「青木文庫（仮）」の開設準備も本格化しています。一足先に、今年度から年報のデザインなどを一新しますが、それにともない「開かれた学術雑誌」へのバージョンアップも図っていきます。

1999年に創刊された年報をひもとくと、「フォーラム」という名づけには「運動体のニュアンス」が込められており、ジェンダー問題に関する「活動の拠点」として大きく発展することが期待されていたことがわかります。また、学生がジェンダー問題に気づき、対処する力を獲得することも大事にしており、その一環として事務局スペースで談笑するコーヒーアワーが設けられました。ここ数年は教育研究嘱託の方の尽力により、以前に比してコーヒーアワーの開催回数が増えており、セクシュアリティの問題が十分に意識されるようにもなっています。図書の貸し出しも増え、自主的な読書会も始まりました。ジェンダーフォーラムは学生たちの活動拠点に再びなりつつあります。

現在では設立時と異なりジェンダーという言葉自体を聞いたことがないという人は少ないと思います。ジェンダー視点から批判する発想と論理は日本社会に一定程度定着しています。他方で、日頃学生と接しているとジェンダー規範の根強さもまた痛感します。ジェンダー秩序に対する違和感が抑圧され、それを問う契機が希薄なことは、若者（に限らないですが）が「社会」を意識することができずに、政治に対しても傍観的であるような身振りに通じています。

こうしたなかで、初代所長が庄司洋子先生（現：名誉教授）であったことの意味が浮上してきます。東京都民生局からそのキャリアを出発させたこともあり、庄司先生の研究は、被抑圧者の視点から家族や夫婦の関係性を捉え返し、社会や国家の暴力を個別具体的に問うものです。私はここに立教大学ジェンダーフォーラムの、ひいては実践の学であるジェンダー研究の初心を見る思いがします。

「活動の拠点」という初発の発想を忘れずに、研究活動の成果発表の場である年報の内容を充実させ、広く注目を集める学術雑誌に育てていく。そうしたなかで、ジェンダーフォーラムの存在を対外的に高めていく。それが20周年に向けての抱負です。

第71回ジェンダーセッション（2017年5月23日（火））

「「からゆきさん」にみる性・移動・権力の諸相」

登壇者：嶽本新奈氏（日本学術振興会特別研究員 PD・明治学院大学）

講師の嶽本新奈氏は、「からゆきさん」と女性たちをめぐる権力を、「出稼ぎ」の女性史として新たに位置づけた、新進気鋭のジェンダー史研究者である。本講演は、著書『「からゆきさん」――海外〈出稼ぎ〉女性たちの近代』（2015年共栄書房）のエッセンスに、「移動」という側面からの新たな考察を加えた、非常に充実したものであった。

「からゆきさん」とは、明治から大正にかけて「おなごのしごと」のため海を渡った日本人女性の呼び名である。「からゆきさん」に関する文献資料からは、女性たちの経験や生き様は実に多様であり、当時の庶民の間では「身売り」と「出稼ぎ」は不可分であったことがわかる。女性たちは時に「密航婦」として摘発されながら、様々に分業化された渡航幇助ネットワークを介して海を渡った。女性たちを南洋へと押し出した最大の要因は、明治の近代化における海外膨張主義であった。日本人男性の移住・定住促進のために日本人女性の性的慰安が需要される中、「からゆきさん」となった女性は占領地・植民地では公娼制度によって管理され、それら以外の地では日本政府によってことごとく切り捨てられた。

嶽本氏は「からゆきさん」を単なる膨張主義の犠牲者とみなすのでは不十分だと指摘する。中国・朝鮮人「慰安婦」の監督をした「からゆきさん」、朝鮮人工夫に恨みをぶつけられた「からゆきさん」、「日の丸」のおかげで生き延びられたという「からゆきさん」。エスニシティやジェンダーだけでなく、植民地主義も複雑に絡み合う中で生きざるを得なかった、そして、ミクロからマクロに至る複層的な権力によって、「近代化」の中で幾重にも不可視化されてきたのが「からゆきさん」であった。

「からゆきさん」の故郷のひとつ、天草出身の嶽本氏は、幼い頃「上海から鬼がくるぞ」と叱られたという。天草の海は「隔たり」でなく「繋がり」であり、東京よりも上海の方が感覚的に近かったのだ。「からゆきさん」となった女性もおそらく共有していた感覚であり、彼女たちの故郷にルーツをもつ嶽本氏だからこそ、掬い取ることができた女性史でもあったのだろう。

当日は会場がほぼ満席となる盛況ぶりで、講演後、「権力」概念の捉え方や、前借金、女性史における「からゆきさん」と「日本人慰安婦」の関係性、「からゆきさん」をとりまく歴史的コンテクストなど、活発な質疑応答が行われた。

今回のジェンダーセッションは、「からゆきさん」に限らず、女性と植民地主義をめぐる現在の問題を考えるための様々なヒントを、現代日本の人身取引など東・東南アジア女性の移動をめぐる権力を研究する私に与えてくれた。これを契機に、「からゆきさん」の多様な生が、現在を生きる一枚岩ではない女性たちの生と、どのように継続・断絶しているのか、一人のフェミニストとして〈アジア〉の〈女〉たちの歴史の展開可能性を模索してゆきたい。

大野聖良（日本学術振興会特別研究員 PD・フェリス女学院大学）

2017年度公開講演会（7月8日（土））

現場発！LGBTから考える多様性のある社会、人権としての性

講師：石坂わたる氏（中野区議会議員）
薬師実芳氏（NPO 法人 ReBit 代表理事）

LGBT 問題を取り上げた今回の公開講演会では、中野区議会議員の石坂わたる氏、そして NPO 法人 ReBit 代表理事の薬師実芳氏から LGBT を取り巻く現場の声を聞くことができた。

石坂わたる氏は同性愛者であることを公表した後、中野区議会議員に当選（現在は第2期）。性的マイノリティを含む様々な悩みを抱える区民の声を政策提言の場に届けるのが自らの役目だと石坂氏は言う。同性愛者であることを公表している彼だからこそ、打ち明けられる悩みが区民にはあるのだろう。職場で性的志向がばれて性的行為を強いられた、同性カップルで一緒に住む家が見つからない等、石坂氏に寄せられる相談は多種多様だ。先進的・試行的な取り組みを行うことができるのは地方自治体の強みであるという。各自治体の仕組みづくりが積み重ねられた結果、法律制定につながった海外事例もある。だからこそ、国政・都政よりも当事者に更に近いコミュニティレベルで活動している石坂氏の存在は大きい。

薬師実芳氏は、女性として生まれ、現在は男性として生きているトランスジェンダーだ。大学在学中に立ち上げた「大学公認学生団体 Re:Bit」は、2014年に「NPO 法人 ReBit」となり、性的マイノリティであることに悩む子どもたちの居場所になると同時に、彼らに必要な支援や教育、情報発信を行っている。学校や自治体を対象に行う「出張授業」では、ReBit に所属する LGBT の学生が講師となりカミングアウトをすることで、教育関係者や子どもたちが性的マイノリティについて知る機会を提供している。確かに LGBT 教育を小学校から行うことに時期尚早との声もある。しかし、LGBT 当事者の多くが小学校高学年から高校生の間に自殺願望を抱くという現実を考えれば決して早くはないというのが薬師氏の考えだ。ReBit では教員が子どもたちに性の多様性について教えるための教材を開発し、教育現場から性的マイノリティに対する理解者を育てる支援も行っている。

現在日本では13人に1人が LGBT と言われている。これだけ身近な存在である彼らに対して無関心・無知のままではいられない。石坂氏・薬師氏が行っているような当事者に寄り添った活動の輪を社会全体に広げていくことが必要だ。それが一人ひとりの多様性を尊重する社会の実現へとつながる鍵となるのではないだろうか。

根本杏奈（ジェンダーフォーラム運営委員／本学職員）

リレーコラム
この＜虹色＞の片隅に　― Tokyo Rainbow Pride 2017*参加記（5月7日）―

藤井　駿（本学コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科4年）

蒸し暑い GW 最終日だった。＜虹色＞の旗や缶バッチを付けた沢山の人が、代々木公園に吸い込まれていった。『Tokyo Rainbow Pride 2017』のロゴアーチをくぐれば、そこには有名企業、NPO 団体、各国の大使館ブースが所狭しと並んでいた。ドラァグクイーンから私たちのような大学生までが、立ち寄ってはこの開放的な雰囲気を味わっていた。

私は性的マイノリティである一人の大学生として、この会場に居た。＜ LGBT ＞ブームの中心に何か投げかけてやろうと意気込んでいた。そこで虹色を一切身に付けずに白いシャツを着て、「ここに居ない人たちに、メッセージをどうぞ。」と会場にいる知り合いの知り合いにと人伝いに黒板を渡した。＜私たち＞が何を考えているのか知りたかった。しかしそこで返されたのだ。「メッセージなんかないよ、特に。ただのお祭りだし。」私はハッとした。縦横無尽に入り乱れるこの群れに、行き先などない。これは「ただのお祭り」なのだ。

このところ週刊誌の特集などにおいて、＜ LGBT ＞ブームへの批判的なメッセージが、＜ LGBT ＞内外の人々によって投げかけられている。性的マイノリティ運動は新自由主義と手を組み、経済格差をはじめとした様々な格差が私たちの連帯を阻んでいる。そして低所得者の異性愛者をも社会から排除し、一部の＜ LGBT ＞だけが恩恵に預かれるような社会が作られようとしている。代々木公園では野宿者排除に反対する団体がビラを配り、歩道橋にはイスラエルのピンクウォッシングに反対する横断幕が掲げられていた。

一過性の＜ LGBT ＞ブームという、先行不明の行列に並んでいる＜私たち＞の存在がある。それはきっと、大きなインパクトを社会にもたらしているだろう。しかしこの「ただのお祭り」はどこに流れ着くのだろうか？――＜私たち＞とは誰なのか。そして、何を問題としていて、どのような社会を実現したいのか。あの日から私も、もう一度考え直している。会場に来られなかった / 来ようとしなかった、この＜虹色＞の片隅にいる人々を想いながら。

① ②

＊ Tokyo Rainbow Pride 2017
「性的指向や性自認（SOGI = Sexual Orientation, Gender Identity）のいかんにかかわらず、差別や偏見にさらされることなく、より自分らしく、各個人が幸せを追求していくことができる社会の実現を目指す（HP より引用）」イベントとして、代々木公園などをメイン会場に2010年から開催されている。
2017年の動員数はのべ10万8000人。

①：参加するにあたってのテーマは「“ 遍在する私たち ” の匿名性」
②：TRP 会場ではこのような T シャツを着用した。デザインは、昨年小田原市の自治体職員が作成して問題となった「生活保護バッシング」ジャンパーのパロディ。ラディカルな主張が失われつつある＜ LGBT ＞ブームに、他のイシューを抱える人々との連帯の意味も込めて風刺を投げかけたつもりだ。